

救護第12班 3月29日～4月3日 看護師・志賀 陽子



街は商店がまだ閉まっているところが目立ち、開いていても昼までとか。商品がありません。救援物資はある程度入ってきていましたが、食品の賞味期限がぎりぎりだったり、サイズなど種類の多い下着類も十分ではありませんでした。ライフラインはほとんど復旧していて、自宅が壊れていなければ帰れる時期。でも街中はガソリンを求める車が並んでいる状態でした。



現地は日に日に変化していて、鳴瀬庁舎の救護所も受診者は80人くらいで医療ニーズも変わらなかったけれど、リピーターが増えていると感じました。特に病院の本部に帰ったとき(通常診療体制に移行するため)中等症エリアが廃止されていたことに変化を感じました。震災の被災地は言葉で表現できないインパクトがありましたが、被災者の方々が互いに励ましあっている姿が印象的でした。

震度4～5くらいの余震が続いていて、ホテルでは目で見て建物が揺れていたし、壁の亀裂がきしむ音も、初めて聞きました。現地はとにかく寒く、ホテルでエアコンつけてても暖かくなりませんでした。